

## 介護実習の質の向上を目指したルーブリック改善の取り組みと課題

福田 洋子      鷺尾 敦      野呂 健一      寶來 敬章  
高田短期大学 高等教育研究会

### はじめに

社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会の報告書「介護人材に求められる機能の明確化とキャリアパスの実現に向けて」(平成 29 年 10 月)<sup>1</sup>を踏まえ、社会福祉士介護福祉士学校指定規則の一部を改正する省令によって新カリキュラムが、2019 年 4 月より実施された。介護福祉士養成課程におけるカリキュラムの見直しは、介護の質の向上に向けた取り組みであり、介護福祉の専門職として、介護職のグループの中で中核的な役割を果たし、認知症高齢者や高齢単身世帯等の増加などに伴う介護ニーズの複雑化・多様化・高度化等に対応できる介護福祉士を養成することを目的としている。また、介護福祉士養成課程における介護実習の教育のねらいは、地域における様々な場において、対象者の生活を理解し、本人や家族とのコミュニケーションや生活支援を行う基礎的能力を習得する学習であり、本人の望む生活の実現に向けて、多職種との協働の中で、介護過程を実践する能力を養う学習とすることである<sup>2</sup>。

介護実習での学びの評価は、実習後に、実習評価として実習指導者より出される。しかし、実習を通しての学生の成長の状況が、従来の評価からは読み取りにくく、その後の学習や実習で、学生自身、自分がどれくらいできていたのか、課題は何か、目標をどこに設定すればよいのかが見えにくい評価であった。この状況を受け、本学高等教育研究会で評価方法の検討を行い、従来の評価票による評価からルーブリックを用いた評価に変更した。

宮本ら<sup>3</sup>は、初学習段階における「介護実習記録」のルーブリック評価の試作を行い、学生が、ルーブリック評価の視点や到達目標を理解していることで、学生の動機付けを促進し、学習に繋げることができ、実習事前指導や実習中指導のしやすさにもつながったと報告している。また、小林ら<sup>4</sup>は、社会福祉士養成における相談援助実習指導の評価方法に関する研究で、学生が他の学生と比較して出来たかどうかではなく、教員が求めるものに対して、学生がどの程度まで達成できているかを評価するためにルーブリック評価を用い、相談援助演習における実習前教育の評価として応用可能かどうかの研究を報告している。

高等教育研究会が介護実習の評価方法にルーブリックを採用したのは、各実習でどこを目指すかを明確にし、何がどこまでできているかを学生に考えさせ、自身の行動を評価と結びつけ振り返りができるようになることが重要と考えたからである。これまでに 7 回の介護実習でルーブリックによる評価を行い、ルーブリックの改訂を繰り返して来たが、実習指導者や学生からもわかりやすくなったと評価を得ている。また、介護人材が減少する中で、介護福祉士を目指す留学生の入学が多くなっており、ルーブリック評価についても日本語能力でハンディのある留学生に対応してきた。このように学生の実習にお

ける質の向上を目指したルーブリックの開発から、より適切な評価へ改善をしていった取り組みと今後の課題を報告する。

## 1. ルーブリック導入の目的

介護実習は、2年間の学びの中で、450時間という膨大な時間数を使い、介護福祉施設において実践的に学ぶ学習である。学生は、450時間を厚生労働省が定める実習施設Ⅰ・実習施設Ⅱの区分の介護福祉施設で実践を通し介護の方法を学んでいくことになる。実習施設Ⅰは、デイサービス、グループホーム、養護老人ホームなど、いわゆる在宅とみなされる施設での実習である。実習施設Ⅱは、特別養護老人ホーム、老人介護保健施設、障害者支援施設での施設実習である（表1）。どの施設に何日行くかなど詳細は、各介護福祉士養成施設（以下、学校と呼ぶ）に委ねられている。

表1 本学介護福祉コースの実習構成と内容

実習区分		単位数	規定時間数	期間	実習施設
実習Ⅰ	実習Ⅰ	2	90時間	1年次 8月下旬 10日間	通所介護施設 グループホーム 養護老人ホーム・ケアハウス 療養型介護施設 小規模多機能型居宅介護
	実習Ⅱ	4	180時間	1年次 2～3月 20日間	特別養護老人ホーム 介護老人保健施設 障害者支援施設
実習Ⅲ	4	180時間	2年次 9月 20日間		

実習終了後には、実習における評価が示される。実習評価は、学校が提示した実習評価票に施設の実習指導者が実習の全体を通した学生の評価を付けることになる。

ルーブリック評価導入までの評価票は、三重県介護福祉士養成施設協議会が作成した「介護実習の手引き・実習ノート」（以下実習ノートと呼ぶ）に掲載されている評価票で、A4の紙1枚に、「実習態度（5項目）・自己目標（2項目）・コミュニケーション（1項目）・介護活動（利用者理解、生活支援技術3項目、福祉用具の理解2項目、介護過程の展開5項目、観察（1項目）、記録（1項目）、報告（1項目）、専門知識（1項目）・施設の理解（2項目）」から構成されている。各項目の評価点は、5段階評価で、5点（大変良い）、4点（よい）、3点（普通）、2点（努力を要する）、1点（かなり努力を要する）となっている。評価点は、各項目の評価点だけでなく、総合評価点も記載される。評価にあたり、指導者には、実習ノートに掲載されている介護実習評価基準を参考にして評価できるよう工夫されている。実習評価は、成績に反映される為、学生は、評価点で一喜一憂することになる。つまり、総合評価の点数が良ければ、安堵し、「私、頑張ったから」と自分自身を誇らしく思い、点数が悪ければ、「指導者は観ていないからだ」、「あの施設は厳しい」など他人の所為にすることがしばしばある。

実習後の実習評価点は、次の実習へのステップアップをするために、どこができてどこができなかったのか検証する必要がある。しかし、これまでの実習評価票は、総合評価の点数だけで、良かった、良くなかったと判断してしまう傾向があった。それは、点数が高い理由や点数が低い理由が分かりにくいことが原因でもある。点数に納得がいかない学生には、教員が、普段の学生の傾向と指導者からの情報

で原因を推察し、学生に説明し、納得させているところがあった。実習の最終カンファレンスで実習指導者から実習内容を褒めてもらった学生が、実習評価点も良いと想像していたところ、評価点が3点であったため、実習指導者は本当のことは言わず、お世辞を言ったのだとショックを受けることがあった。実習で、一生懸命頑張ったにも関わらず結果が悪く、次の目標や課題が見つげにくい評価表の意義は何か、学生の状況から実習評価とは何かを改めて考えた。

一方、実習ノートの評価表の課題として、評価に評価者の経験値や価値観、判断の仕方など主観が入りやすく、学生に対しての公平な評価とならない傾向があることも否めなかった。実習指導者のやさしさや厳しさが評価に関わってくることもしばしばあった。

実習評価は、実習Ⅰから実習Ⅱに、さらに実習Ⅲに進むにつれ経験が積み、学生自身の知識や技術が向上していくことが望まれる。その成長状況を確認できるのが評価であるにもかかわらず、実習最後には、単に点数のみに着目することに疑問があった。学生が、その実習の振り返りをする時に、実習評価を通して次の目標が自然と見えてくるのが理想である。実習は、学校で学んだ知識を実際に見聞きし、経験する場であり、あやふやな知識を、経験を通して実践できる確固たる知識技能に磨いていく場である。その学びの評価を、総括評価から形成的評価へ評価の主眼を変えルーブリックを導入することにした。学生が介護実習で修得すべき介護関連の内容について、評価の観点と基準（目標と到達度）を明確にするために、本学高等教育研究会で、介護実習の成果を可視化することにより学生の現状と目標が明確となり、介護技術や介護姿勢の質を高めるための評価手法として、ルーブリックの開発を実施した。

表2 ルーブリック評価表（ルビ付き）

評価領域	評価項目	評価着眼点	1点 できない しようしない	3点 努力中 しようしている	5点 実習の目標 できる、ほぼ達成	実習Ⅰ	実習Ⅱ	コメント欄	介護福祉士の姿
実習態度	積極性を みられる	利用者や職員の名前を 見える	利用者や職員を名前で呼 べない。	利用者や職員の名前を言 えない時があるが、できる だけ呼ぼうとしている	利用者や職員の名前を覚 え、名前で呼んでいる	—点	—点		利用者や職員を、TPOに応じて名 前で呼んでいる。
		わからないことを聞き、 聞いた上で問題を理解し、 解決に向けて行動する	実習でわからなかったこと をそのままにしている	実習でわからなかったこと を職員に質問をして、問 題を理解するが行動 に移さない	実習でわからないことを 職員に質問して、問題 を理解し、解決のための 行動に移せる	—点	—点		わからないことは他の職員に質問し て、問題を理解し、課題解決のた め行動に移せる。さらに行動の振り 返りをしている。
		指摘された実習中の 学習課題に気づき、改 善に努める	指摘された実習中の 課題を改善しようとする姿 が見られない	指摘された実習中の課 題を改善に努めようとして いる	指摘された実習中の課 題を改善に努めている	—点	—点		他の職員から指摘されたことを専門 職としての課題として理解し、改善 に努めている。
		実習中間・最終のカン ファレンスの際に積極 的に発言する	実習中間・最終のカ ンファレンスの際に促され ても質問や意見が言えな い	実習中間・最終のカ ンファレンスの際に求めら れて質問や意見を述べ ることができる	実習中間・最終のカ ンファレンスの際に自発的 に質問や意見を述べること ができる		—点		様々なカンファレンスにおいて、積 極的に質問をすることができること に、自分の意見を述べている
		利用者の話を聞き、必 要な情報を得る	利用者の話を聞いて、必 要な情報が得られない	介護をするにあたって必 要な情報を利用者から 聞き取ろうとしている。	介護をするにあたって必 要な情報を利用者から 聞きとり、情報を得ている		—点		介護をするにあたって、常に必要な 情報を利用者から聞きとるとともに、情 報の信頼性を確認している。

## 2. ルーブリックの改善とその波及

ルーブリック作成にあたり評価項目は、実習ノートに記載されている実習評価基準を基に作成した。ルーブリックを採用した当初の実習指導者の意見は、ルーブリックの評価基準が「わかりやすくなった」とか、評価項目で「やれない項目がある」「今の表現では判断しにくい」などの単に批判的なも


のであったが、回を重ねるうちに、ルーブリックの内容や表現の仕方への助言になったり、自分たちの経験値をルーブリックに反映できるような説明になったりと、ルーブリックと一緒に構築していくような意見が変わっていった。また、ルーブリックの内容から、学生を観察している自分の評価視点と自身の動きを客観視するような意見になり、学生の動きをイメージしやすくなるような表現を用いるようになったのである。ルーブリックの導入は、学生が実習での学びの中で努力したことが、実習段階に応じて伸びていくことを目指したものであり、実習指導者の実習評価を、学生自身が納得のいく評価として受け入れるための質の向上を目指したものであったが、実習指導者の評価観の改善や評価力向上にも繋がっていった。

## 2・1 ルーブリックの表現の工夫

ルーブリックに使われている表現の仕方、「～が理解できる」「努力している」という表現は、学生の行動からは見えにくく、観察しづらく、評価しにくいとの実習指導者の意見もあった。そこで評価しにくい表現の項目は、「報告している」「記録に記載されている」と動きや考えが伝わる表現を工夫した。

ルーブリックの開発当初は、5段階で基準を設けていたが、膨大な評価指標がある上に、一つひとつの評価指標ごとに5つの基準の記述語を用意することは、見る方も大変な作業となるであろうと考え、3段階とした。一番良い点が5というのは、もともとの評価の着眼点が5点満点であったからである。しかし、3つの段階では評価しづらいケースも指導者から報告があり、その間を自由にに入れてよいということにした。それをすべての指導者に理解してもらうため、間について表記したガイドラインを2020年度作成した。「1点できない・しようしない」「2点努力しているができない」「3点努力している・しようとしている・できないときがある」「多少できているが不十分・努力はしているが、目標には到達していない」「5点実習の目標・実習生として十分である・できる・ほぼ達成している」として評価点の枠組みを表示した(表3)。

表3 評価点の枠組み ガイドライン



1点	(2点)	3点	(4点)	5点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・できない</li> <li>・しようしない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・努力しようとしているができない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・努力している</li> <li>・しようとしている</li> <li>・できないときがある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多少できているが不十分</li> <li>・努力は十分しているが、目標には到達していない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習の目標</li> <li>・実習生として十分である</li> <li>・できる</li> <li>・ほぼ達成している</li> </ul>

## 2・2 実習自己評価のあつかい

実習評価は、実習後に指導者から受け取るルーブリックと自己の実習を振り返る自己評価用ルーブリックがある。自己評価表は、実習評価表の内容と同じものを使用し、実習後に学生が記入し、指導者に提出していた。実習指導者は、学校から送られてきた学生の自己評価を見てから実習評価を行っていた。しかし、指導者が学生の自己評価を見てから指導者評価を行うことは、独立した評価にならないと高等教育研究会で意見があったことから、学生の自己評価票を2020年度から指導者に提出しないようにした。

### 2・3 留学生用ルーブリックの工夫

介護福祉士を目指す留学生が増えたことにより、2019年度から留学生の自己評価用ルーブリックに使われている漢字にひらがなを付け読みやすさを工夫した。2020年度からは、エクセルの漢字にルビが振れるようになり、ルビの振り方を工夫した(表2)。その他、留学生は、日本語表現になれていないことから、表現の意味の分かりやすさを工夫として、日本語教師に意見を求めた。例えば、「指摘された実習中の課題の改善に努めている」は、「実習の時に言われたことをできるように頑張っている」のように表現する方がより理解しやすいというアドバイスがあった。しかし、授業では専門用語を理解することが必要であることから、留学生に対するやさしい日本語表現での評価基準の解説は、今後の課題とした。

### 2・4 実習指導者の評価に対するコメント欄の工夫

開発したルーブリックには、指導者の評価に対する意見(コメント)を書く欄がある(表2)。評価点の悪かった内容について、どこができなかったか、なぜこの評価点になったか等の実習指導者の意見が書けるようになっている。さらに、評価表の最後のページには、「実習態度」「自己目標」「コミュニケーション」「介護活動」「施設理解」の5項目に対して総括コメントを書く欄を添付している。学生は、各評価基準のコメントと共に5項目の総括コメントを見て評価点と共に評価点の意図を理解するようになっている。この5項目の総括コメントも学生自身がみることから、実際評価点が悪くても、実習指導者は学生が意欲を落とさないようにとの配慮から、率直なコメントではなく、どちらかと言えば労をねぎらう言葉が記載されていることが多かった。指導者からの聞き取り調査でも、「学生がみるので、やる気をなくすといけないから本音で書けない」という意見があった。そこで、2020年度から学生に実習評価を伝えるため(形成的評価活動をするため)の実習指導者がつけたルーブリックと実習での成績をつけるための総括評価として、総括コメントが記載できる総合評価の評価表を分けて提出していただくように工夫した。この総括コメント表は学生に見せないことを指導者に伝えた。結果、学生が見ないので、「本音を書ける」という意見と、「見せても見せなくても変わらない」という意見があった。

## 3. ルーブリック評価を広めるための課題

三重県介護福祉士養成施設協会は、三重県の介護福祉士を養成している5校から構成されている。各校は、三重県版実習ノートに記載されている実習評価の評価基準に基づいて各校の特色を加味した実習評価を行っている。2020年度に三重県版実習ノートを改訂するための委員会が召集された。2020年9月に、実習評価の基準と評価表を変更して、高等教育研究会で開発したルーブリックを評価基準および評価方法として採用することを提案した。しかし、ルーブリックそのものの理解がなされていないことや、評価の方法を変えることに難色を示す意見があることが明らかとなった。

ルーブリックは、評価指標が多いと記述語の多さに圧倒されて負担感は大きくなることは否めないが、使い慣れてくると評価の公平性や評価にかかる時間の短縮などにつながることを理解できてくる。こういう利点を理解して、実習評価として採用してもらうため、2021年1月19日の実習ノート改訂の会議をルーブリックの説明に費やした。教員(以下、委員という)に対し、ルーブリックを用いた評価を取り入れる意義ねらい、実習ノートに記載されている現行評価との違いを説明し意見をもとめた。

### 3・1 説明前のルーブリックへの教員の意見から

ルーブリックに対する委員の意見は表4に示すように、ルーブリックが実習指導者の負担にならないかということであった。判定時間がかかるのではないかと、実習生が多いとさらに負担が増すのではないかと心配する意見が多かった。また、表5の改善への意見では、1点と5点の付け方はわかりやすいが、3点の付け方の表現が曖昧で理解しにくい。すべての評価基準をルーブリックにあげる必要はないのではないかとの意見もあった。評価点の付け方にも、各項目の評価点の合計から平均点を出すのは負担であると総合評価の点数に対する改善意見があった。ルーブリックから総合得点を出すには、各指標の重みをつけていく必要がある。現行のルーブリックは、総括評価のための総合点数は、平均をとっていないので、総合点数について理解を求める必要性があることも課題となる。また、三重県版実習ノートへは、現行の評価基準もそのままにし、ルーブリックも一緒に載せるとイメージしているようであった。

表4 ルーブリックについて教員の意見

賛成意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価の指針としてわかりやすいと思う。</li> </ul>
反対意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在施設職員が多忙の中、一人の評価にこれだけの枚数があると、1施設に2～3人した場合負担になるのではないかと</li> <li>・実習目標の内容は、どのような事業体でも応用できそうな汎用性の高い内容になっていると思うし、実習自己目標の例示は必要ないように思う</li> <li>・ルーブリック評価の今のボリュームでは、正直現場での活用は難しいように思える。</li> <li>・実習施設、養成校ともに現在の評価方法に課題意識を持っているのであれば別ですが、そうでない場合は現場からの反発が予想される</li> <li>・指導に関わるスタッフが複数いる中で集約するのは難しいのではないかと。負担が大きくないか。</li> <li>・評価者が複数の場合、整合性が取れるか難しいように思う</li> <li>・すべての評価は難しいのではないかと。</li> <li>・実習生が3名となると日誌を評価する時間も取れないとのことから、ルーブリック導入は難しい、ルーブリック評価票をお願いする施設は限られるのではないかと考える</li> <li>・実習ノートの評価票項目とルーブリック評価項目に違いがある</li> <li>・ルーブリック評価にするなら実習ノートの評価項目に変更の必要がある</li> <li>・数字を出すのも大変なのに、コメント欄に書くのも大変だと思う</li> <li>・実習だけ専属の職員であればルーブリックに専念できるが現場職員が同時にする場合は大変である</li> <li>・現在の評価方法で問題がないのではないかと</li> <li>・評価指数に基づいて評価点を出すのも評価する人の主観によるものであり、その主観の統一性はどのようにすれば良いか疑問である</li> <li>・実習指導者になったつもりで考えると、一つ一つ読み点数を付け、合計し、割って平均を出すのが大変である。(PC上でシステムがあり、システムで評価ができればよいが)</li> </ul>

表5 ルーブリック改善への教員の意見

ルーブリック改善への意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>・項目が多いように思う。</li> <li>・1点と5点の付け方はわかりやすいが、3点の付け方の表現が曖昧で理解しにくい。</li> <li>・評価項目は絞ったほうが良いと思う。</li> <li>・ルーブリックは、手引きと別紙にし、各施設に配布する方が良い。</li> <li>・評価表の答えが同じような内容もあるためもう少し集約されて欲しい。</li> <li>・自己評価用ルーブリック（留学生用）は、ルビ振りのため見にくいし、読みづらい。</li> <li>・斜線評価なしで斜線が入っているが、学校によって実習Ⅰ・実習Ⅱの期間設定が違うため、斜線入れは無い方が良い。</li> </ul>

### 3・2 説明後のルーブリックへの教員の意見

ルーブリック説明会議後、実習評価として採用する前に、学生の自己評価をルーブリックで実施してみることを、ある委員から提案された。以前、その委員は、「実習評価で5点はあり得ない、5点は職員レベルなので、学生が5点をとることはない」と実習指導者にも学生にも説明していたようであるが、ルーブリックの説明を聞いて、学生の学びとしての5点があることを理解でき、卒業後の目指すべき目標も別に記載されている（表2参照）のでわかりやすいと納得していた。

今までは、評価点に納得がいけないと言ってきた学生に対し、教員は納得させる材料をそろえて説明するが、実習評価以外のことまで説明しなければ納得しない学生もいた。ルーブリックでは評価が明快なので、教員の負担も少なくわかりやすいのではないかという意見があった。また、まずは教員がルーブリックに慣れることであるとの意見があった。

### 3・3 教員の意見からの課題

委員の意見をまとめると次の3点があげられる。

- ①各学校は、実習期間など実習の在り方が違うので、ルーブリックにした場合、どのように取り入れたらよいか。
- ②在宅実習を取り入れている学校から、在宅実習のルーブリックを作成しなければならないのか。
- ③実習評価をルーブリックとした場合、各学校の成績評価のつけ方の違いがあることからその整合性をどうするのか。本学では、10点から6点が合格、5点以下が不合格で、他の学校では、ABCDE評価を採用しているところもあることから、実習評価と学校の成績評価とをどのように一致させるかも検討課題である。

などの意見が挙げられたことから、各学校の実習評価として、ルーブリックの導入には、検討しなければならないことがあることが明らかになった。今後、この課題解決に向けての協議を進めることになった。

## 4. 実習指導者のルーブリックへの意見

介護実習での評価方法として2018年度よりルーブリックを導入し、実習評価としてルーブリックの改善を行ってきた。2019年度入学生からは、学生の実習Ⅰ、実習Ⅱ、実習Ⅲの評価をルーブリックで実施したことから、実習Ⅲの終了後、今後の方向性を検討する指標とするためにルーブリックの内容について実習指導者にインタビュー調査を実施した。

調査日：2020年11月～12月

調査方法：調査対象に主旨を説明し、同意を得てインタビュー調査を実施した。

対象：実習指導者歴が長く、三重県版介護実習ノートの実習評価票を使用し実習評価を実施してきた経験と、本学の実習評価ルーブリックを理解し、ルーブリック導入後、実際に評価を実施してきた実習指導者5名を調査対象とした（表6）。

表6 実習指導者のルーブリックに対する意見

実習指導者のルーブリックに対する良い意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体的に表現がわかりやすくなった</li> <li>・ガイドラインは、あったほうがわかりやすい</li> <li>・一人ひとり細かく見ていくには良い</li> <li>・実習ノートを見なくても良いのでルーブリックの方が良い。</li> <li>・理解しているかどうか、今後は質問してみることにする</li> <li>・実習の様子をとらえているようになった</li> <li>・このことはできないがこのことはできるなど具体的に細かく書いてあるので評価項目にあてはめやすい</li> <li>・字の大きさは、これくらいで良い。</li> <li>・ルーブリックになってから評価がつけやすくなった。</li> <li>・字が多くて読むのが面倒くさいという意見は、指導者の意見としておかしい</li> </ul>
実習指導者のルーブリックに対する改善意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字の間違いを指摘しても直してこないが、評価を付ける項目がない</li> <li>・重度とは、寝たきりの人なのか、認知症の人なのか、どちらでもよいのか迷う</li> <li>・字が小さい</li> <li>・もっと詳しく書いても良い</li> </ul>

実習指導者からの肯定的な意見としては、ルーブリックでの評価のしやすさがあげられていた。学生の動きをルーブリックの内容と比較、検討している意見であった。また、「字が多くて読むのが面倒くさいという意見は、指導者の意見としておかしい」という意見も聞かれ、各学校の教員に報告できる意見である。一方、改善意見では、もっと詳しくても良いとの意見があった。ルーブリックに慣れて、学生の動きを細かく見られるようになってきているような意見である。さらに字が小さくて見にくいとの意見があったので、実習指導者の高齢化に伴って、字の大きさなど、より見やすいように工夫する必要がある。

## 5. 日本人学生と留学生に対する実習指導者の評価視点の違い

実習指導者へのインタビューで語られた意見の中に、日本人学生と留学生の評価の視点の違いがあった。ルーブリックへの直接的な意見ではないが、評価を付ける際に実習指導者が無意識に行ってしまう行動内容であったことから、その違いについて取りまとめた。実習指導者は、実習は学びの場であることから、実習生の態度として積極的に行動することを評価視点においていることがある。日本人学生と留学生の実習態度を見ると、留学生の方がより積極的に利用者や職員とコミュニケーションを取り、質問も多いので、評価視点の違いとして、留学生の積極的な動きに高評価を付ける傾向があった。留学生は、日本語もうまく話せないし、記録も漢字の間違ひがあるなどきちんと書けないが、それを補う明るさと一生懸命さがあると話される。留学生のコミュニケーション能力の高さは、日本に来る前に自国で働いていて、社会人経験が有ることからであろう。高校を卒業したばかりの日本人学生に比べ、留学生はコミュニケーション能力等の社会性があり、他国で働くためのモチベーションも日本人学生より高い学生が多いことに繋がる。

つまり、実習は初めてであるが、人に対する接し方などはすでにできている留学生が多いということである。高校卒業後に入学した日本人学生と社会人経験のある留学生を、同じ実習生として受け入れているが、留学生の一生懸命な実習態度等に対し、評価を付ける前に良いイメージがつくられている可能



性があることも明らかにされたので、その一部をまとめた（表7）。

表7 日本人と留学生への実習指導者の評価の違い

日本人学生	留学生
<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本人は、わかっていて当然と評価点が辛くなる</li> <li>・勉強はできないが実習で動きが良い学生は良い評価に繋がるが、積極的でないともったいないと思う</li> <li>・何を聞いていいかわからない学生がいる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生の苦労を考えるとワンランク上げようかと考えてしまう</li> <li>・留学生だから漢字が書けなくても仕方がない</li> <li>・留学生は、よくできていると5点をあげたくなる</li> <li>・留学生は、努力家であるし、コミュニケーションが上手なので頑張っているととらえる</li> <li>・日本人より留学生の方が積極的でよくできていた</li> </ul>

## 6. 学生へのインタビュー調査

実習指導者のルーブリに対する意見を参考に、学生はどのように考えているのかを明らかにする目的で、実習Ⅰ、実習Ⅱ、実習Ⅲの評価をルーブリックで実施した学生から、ルーブリックでの評価について意見を徴収した。

調査日：2021年1月～2月

調査方法：調査対象に主旨を説明し、同意を得てインタビュー調査を実施した。

対象：2年生日本人2名、留学生（ネパール人）1名

### 6・1 学生のルーブリック評価・自己評価への意見

インタビュー調査を実施した学生は、ルーブリックでの評価方法しか自己評価経験がないことから、他の評価方法と比較できないので、ルーブリックでの自己評価と実習評価を比べての意見である（表8）。

学生のルーブリックへの意見は、実習で自分自身が気を付ける着眼点のわかりやすさから、評価がしやすかった。評価点の悪いところは次回の実習で気を付けて修正したことで良い評価に繋がれたとの意見があった。このことから、ルーブリックから学生自身がどのように動けばよいのか考えることがで

表8 日本人と留学生のルーブリック評価の意見

日本人学生の意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的でわかりやすい</li> <li>・自分が思っていたより点数は良かった</li> <li>・コミュニケーションが苦手であるが、コメントのところに指導者から、コミュニケーションが苦手であることのアドバイスがかかれています、自分の思っていたことを指導者も分かっています、良く観ているのだと思った</li> <li>・1点・3点・5点と明記してあるが、迷った時は4点につけた</li> <li>・施設の理解については、施設で説明を受けたことを記録に書いたので困ることはなかった</li> <li>・自己評価票のコメント欄は、学生が書いていいのかわからないか迷った</li> <li>・実習Ⅱのルーブリックは、実習Ⅰより詳しく、どういう場面でも細かく評価がしやすかった</li> <li>・実習Ⅱのルーブリックは、着目するところが細かいので指導者のコメントもわかりやすかった</li> <li>・初めは多くの項目があるので大変そうと思ったが、やっていくと着目するところがわかりやすかったので、つけやすかった</li> </ul>
留学生の意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生の時は、漢字がわからなくて初めは理解できなかったが、途中でルビ振りのものを見て漢字は分かった</li> <li>・実習Ⅰの評価をもらってから評価の点数が悪かったところがあったので、ルーブリックの内容を理解し、良い点が取れるよう気を付けられた</li> <li>・実習Ⅱ以降項目内容を理解して実習に臨んだ</li> <li>・自分では気がつかなかったが、評価点が悪かったことで自分の悪いところを理解でき次に繋がれた</li> <li>・実習指導者のコメントで、観ているところが理解できた</li> <li>・評価点3のところは、良くなるよう気を付けて実施したら、評価点5に上がった</li> </ul>

き、評価点を良くする行動に移せたことが明らかになった。以前は、評価点が悪いと「実習指導者は見ていないからだ」との言葉も聞かれたが、今回の調査で、「実習指導者はよく観ていると思った」との意見があった。

ルーブリックで記載時に迷ったことは、自己評価のコメント欄に自分の意見を書くのかどうかということであった。今後は、学生の自己評価のコメント欄についての検討が必要である。

今回の調査は、3名の学生へのインタビューであることから、意見に偏りがみられる。今後は、学生全員への聞き取を実施し、検討する必要がある。

## 7. 考察

ルーブリック導入前の実習評価は、主観的評価が入り込んでしまうことがあり、公平な評価がなされているのかに懸念があった。しかし、ルーブリック導入後は、状況により左右されることはあるが、実習指導者の経験値からの判断よりも学生の動きを観察し評価するようになったと考える。それは、実習指導者の「学生の動きとルーブリックの評価基準とを確認できるようになった」との言葉からも推察できる。さらに、学生へのインタビュー調査からもルーブリックが実習Ⅰよりも実習Ⅱでは、実習での動きの表現がわかりやすくなっていたのでどこに着目したら良いのかわかりやすかったとの意見があり、学生の実習行動に良い影響をもたらしたとも考える。

一方、介護福祉士養成施設協議会の教員からは、ルーブリック評価の導入は、実習指導者の負担になることから導入が難しい、またルーブリックで評価をしてほしいと頼みにくいとの意見があった。それは、教員自身がルーブリックになれていないことから評価に時間がかかるのではないかと考え、ルーブリックの利点や効果を、実習指導者に説明しにくいということも反対意見の理由ではないかと考える。教員は、これまで使用してきた評価になれており、実習評価では、学生の実習の動きを見て評価する必要があることの理解が弱いのではないかと考える。実習評価は、実習指導者の知識や経験値から判断するものではなく、どの実習生に対しても公平で、正当でなければならない、その評価に近づけられるのがルーブリックであると考え。

ある教員は、「これまで、学生にも実習指導者にも自分自身の経験や知識から評価への思いを語ってきたが、ルーブリックを採用すると、これまでのような説明をしなくてよくなる」と話されていた。教員がこれまで行ってきた、経験からくる学生評価の思いを語れなくなることに、何か抵抗があることも否めないようである。これまでの評価に何の疑問も持たずに来たので、急に変化することにかかなりの抵抗があることも確かである。

本学の介護実習における評価表としてルーブリックを導入後、ルーブリックの表現について実習指導者へアンケートやインタビューを実施する中で、実習指導者と教員の連携関係がより深く築けたのではないかと考える。ルーブリックを通して、教員と実習指導者が評価について共通理解を深めることで、介護実習の改善や学生の指導についての理解が深まるなどの効果があると考え。さらに今回、介護福祉士養成施設協議会の委員へのルーブリック説明会を通し、各校の委員が、実習評価の意義・目的を改めて考える機会となった。今後は、各校の教員が実習評価についての共通理解を深めていき、学生の能

力向上を目指した指導について意見交換ができるようにしていきたい。その為にもルーブリックという評価の共通基盤を持つことが重要となる。

## 8. まとめ

実習評価にルーブリックを導入後、2019年度入学生からは実習Ⅰから実習Ⅲまで3回の実習評価としてルーブリックで評価を実施した。今回、2019年度の入学生にインタビューした結果、ルーブリックにより、これまで自分では気づかなかった自分の弱点を実習指導者の評価から気づき、実習Ⅰよりも実習Ⅱ、実習Ⅲでは、その点に気を付けて評価を上げていったとの意見も聞かれた。ルーブリック導入前は、学生は低い評価点に対して、「実習指導者が観ていないからである」と結論づけていたこともあったが、学生へのインタビューから、「自分の苦手なところをよく見てくれていると思った」との意見が聞かれ、ルーブリックの細かい内容と実習指導者のコメントが学生の良い方向への振り返りに繋がった。

評価表にルーブリックを導入し、実習毎にルーブリックの内容を検討し修正していったことは、実習指導者の評価視点の変化に繋がり、学生は実習評価を今回の実習より次の実習でより高い評価を目指す方向に繋がられた結果となった。今後も、ルーブリックの内容について検討を重ね、より学生の動きに近い表現を目指す必要がある。

現在は、本学、介護福祉コースの学生の実習のみでルーブリック評価表を使用しているが、今後、三重県介護福祉士養成施設協議会の教員たちと協議を重ね、実習ノートの評価表にルーブリック導入を検討し、学生の実習における評価の質の向上を目指していきたい。

## 謝辞

なお、本研究は、JSPS 科研費 JP19K02261 の助成を受けたものである。

## 引用・参考文献

1. 社会保障審議会福祉部会 福祉人材確保専門委員会 (2017)「介護人材に求められる機能の明確化とキャリアパスの実現に向けて」報告書
2. 公益社団法人日本介護福祉士会 (2019)「介護実習指導のためのガイドライン」平成30年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金 社会福祉推進事業 介護福祉士の養成カリキュラム改正を見据えた介護実習科目の実習指導体制のあり方に関する調査研究事業
3. 宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子、重松義成、柗崎京子 (2017)「初学習段階における「介護実習記録」を課題とするルーブリック評価の試作と活用」帝京科学大学紀要 Vol.13 pp77-86
4. 小林哲也、佐々木宰、川廷宗之、杉野聖子、原田聖子、宮脇文恵、永嶋昌樹、三橋真人 (2014)「社会福祉士養成における相談援助実習指導の評価方法に関する研究—ルーブリック評価法の応用可能性について—」人間生活文研究 Int Hum Cult Stud.No.24 pp168-180
5. 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦 (2019a)「介護実習でのルーブリック評価の導入による効果と課題」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第5号、pp.28-39.

6. 鷺尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章 (2020a)、「介護実習ルーブリック評価結果を用いた学生の  
実習分析」『高田短期大学紀要』38号、pp28-39
7. 鷺尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章 (2020b)、「介護実習 I のルーブリック評価の検証-3つの介  
護実習を通じたルーブリックを目指して-」『キャリア研究センター紀要』、6号、pp. 28-39
8. 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦 (2019b)「介護実習におけるルーブリック評価の導入」、『大  
学教育学会第41回大会発表要旨録』.
9. 福田洋子、青木信子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦 (2017)、「介護実習におけるルーブリック評価の  
提案」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第3号、pp. 51-61
10. 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦 (2018a)、「介護実習におけるルーブリック評価導入に向け  
ての課題-実習施設へのアンケート調査から-」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第  
4号、pp. 35-46
11. 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦 (2018b)、「介護実習評価ルーブリックの開発」『大学教育学  
会第40回大会』
12. 鷺尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章 (2020c)、「学生が初めて臨む介護実習のルーブリック評価  
の検証と今後」『日本大学教育学会第42回大会』
13. 松下佳代 (2012)「パフォーマンス評価による学習の質の評価 - 学習評価の構図の分析にもとづいて  
-」『京都大学高等教育研究』18巻、pp. 75-114.
14. 隆朋也他 (2019)「2017年度臨地実習におけるルーブリックを用いた看護技術到達度の学生自己評  
価の報告」聖隷クリストファー大学看護学部紀要, No. 27pp. 31-44
15. 蒲生涼太 (2020)「ルーブリックについての現象学的解説：看護専門学校での教員研修をもとに」関  
西大学高等教育研究 No. 11 pp. 55-64
16. 小宮山陽子、青木雅子、櫻田章子、奥野順子、関森みゆき、酒井麻希、日沼千尋 (2019)「看護基礎  
教育におけるルーブリックの推移と課題に関する文献調査」東京女子医科大学看護学会誌 14 巻 1 号  
pp15-22